日本大學
農獣醫學部
校友會々報

発行所
日本大学農獣医学部
校友会
編集発行者
会報発行委員会
印刷所
東京興工KK

農芸化学科増設決る

―四月から開講―

農芸化学科の設置は、昭和十八年農学部創設の時からの課題であり、初代農学部長で、かつての農芸化学界の重鎮であつた故麻生慶次郎博士も、死ぬまで気にかけておられていたとのことだけに、きつと地下で喜んでおられることと思われる。学校当局・校友・学生が一丸となつて、内容の充実、対外接衝と長い間苦労してやりとげた仕事であるだけに、増設実現は関係者はもちろん、日本大学全体にとつて感慨が一層深く感じられる。ここに新設の農芸化学科のアウトラインを紹介して、諸兄にも一緒に喜こんで戴きたいと思う。

農芸化学科は、広義の農学における各般の基礎的ならびに応用の研究を行うのに、その手段として化学を採使する学問である。従つてこれは理学部の化学や工学部の応用化学と、ある段階での手段は類似していても、その目的が多少異つていて、ここにその存在価値が明らかとなつてくるのであつて時代の要求に応えて、社会に寄与するところが非常に大なる学科の一つである。これが昭和二十三年四月から、本学部の一学科として増設されることになつたのであるが、これが決して一日にして成つたものではないことは、その基礎が前身である農学科農産製造学専攻の十数年の歴史と伝統の上に培われて来たことを考える時当然のことと言えるのではあるまいか。すなわち昭和二十年四月、湘南地方の一角、藤沢市に、当時の農芸化学界の重鎮、故麻生慶次郎博士を初代農学部長に迎えて、旧農学部が設立されたのであるが、当時、農学科の一分科として農産製造学専攻が誕生したのである。教授される学科内容は、農芸化学科と大差なく、業界の最高権威後藤格次、鈴田真一郎両博士の名講義に学生も全国から集り、当初から最も活況を呈した学科の一つであつた。毎週午後は、生物化学・醗酵化学・土壌学・肥料学・化学の実験、農産製造の実習に当てられていたが、この専攻の特徴――もちろん農獣医学部主体の気風でもあるが――として、きわめてなごやかな、師弟の緊張気の内に、実験・実習の懇切な指導を通して徹底的な厳格な教育が行われて来たことであろう。従つて実験実習時には、定刻に帰宅の許された学生は、殆しかつたのではなかろうか。およそ化学を専攻する者は、実験を離れては学問は育り得ないことを考えれば、けだし当然のことかも知れない。従つて、本学科の卒業生は、実践的有能な技術者として、官界・業界に浸透して、指導者として、中堅として大いに活躍している者が多いのも理由の無いことではなかろう。

昭和二十四年四月には、学制の改革によつて、新制大学となり、二十六年春には、農学部と東京獣医畜産大学との合併によつて、現日本大学農獣医学部農学科の専攻として、年と共に充実発展して来たのである。創立以来、環境に恵まれて来た同学科も、都心を離れること一時間余で、中央研究機関との連絡など、化学研究のためには必ずしも絶てが好都合ではなかつた。ここに昭和二十九年春、現在の東京世田谷校舎に同専攻の大部分は移転し、藤沢校舎においては、土壌学・肥料学ならびに広大な研究農場が残されるに至つた。農学科農産製造学専攻が設立されてより十三年、ここにさらに諸施設の整備拡充、教授陣容の強化をして、農芸化学科が四月より増設されることになつたのであるが、必ずや我国の産業科学技術の進展に寄与するところが大なるものがあろう。

農芸化学科の学科内容

農芸化学は、広義の農学における各般の化学的基礎的研究と、広範囲にわたるそれらの応用の研究を行うことを目的とするものである。従つて農学の諸部門においても、農芸化学の寄与と発達とに大きな期待を寄せられていることはいうまでもない。

本学科において講ずる主要な学科目について説明すると、「土壌学」は諸作物の生育培地である土壌の理化学的性質を明らかにし、生産上不可欠の知見を講じ、「肥料学」は土壌学と密なる結び付きのもとに植物生理学、栄養学と並んで、有用植物の生育増強に資すと同時に、各種肥料の製造法並びに植物体に及ぼす影響等の応用を講ずる。「生物化学」は動植物体および各種成分の生物化学的組成および生理物の化学的意義ならびにその変化等を講ずるものである。農芸化学に関する主要なる化学的応用の基礎学科である。「農産製造学」においては、各種にわたる農水産物の利用ならびに工業的製造の知見と技術について教授する。栄養に関する生理や、蛋白質、糖類、ビタミンなどの栄養的意義や価値を深く講ずるのが「栄養化学」である。「食品化学」「食品貯蔵学」は一般食品に関する工業生産面および衛生面にわたる分野の開拓および知見および技術を提供するものに寄与している。「醗酵学」は古くから生産されている味噌、醤油、酒、ビールなどについて生かすためには、実験技術を熟練し、原理および応用を講ずるが、最近微生物利用の醗酵工業は誠に目覚ましい進歩を示し、この分野はますます拡大せられている。これらの微生物利用に関する化学的面は「醗酵化学」によつて講ぜられ、同時に応用面については「応用醗学」により教授する。

また農芸化学は化学とくに「有機化学」の基礎学を必要とし、「分析化学」「理論化学」などは、他の専門化学部門に緊要なる知見および技術を提供するものである。

このような学問の体得と応用を通じて学生も全国から集り、当初から最も活況を呈した学科の一つであつた。毎週午後は、生物化学・醗酵化学・土壌学・肥料学・化学の実験、農産製造の実習に当てられていたが、この専攻の特徴――もちろん農獣医学部主体の気風でもあるが――として、きわめてなごやかな、師弟の緊張気の内に、実験・実習の懇切な指導を通して

本学科卒業生は、食品工業関係醗酵工業方面およびその他関係機関等社会的に甚だ広汎な活動部面をもつており、その学術的研究と活動に対して、社会が期待するところ甚だ大なるものがある。

農芸化学を修め、人格の高い、実践的有能な技術者を養生することが本学科の使命である。

本学科がほこる教授陣容

森　高次郎　生物化学担当。大正十年東大農芸学卒。助手・講師・助教授を経て昭和二四年教授（水産化学）。本年三月定年退官。この間生物化学研究のため米国に留学。東大評議員、文部省大学設置審議会委員、資源調査会専門委員、放射線影響調査特別委員等を歴任。昭和三十二年一月学術会議会員となる。日本農芸化学会幹事。農学博士。群馬県出身。

中島　顕三　栄養化学。食品化学担当。大正十年北大農芸化学卒。大学院を終え、日本甜菜糖から豊年製油に入社。同社研究所長を経て戦後合同酒精に移り、二八年本学教授。昭和七年農学博士。豊年在職中大豆グルーによる合板接着という一大業績を残した。香川県出身。

大村　収　土壌学担当。昭和四年九大農芸化学卒。昭和八年満州に渡り、ハルビン産業試験場農芸化学科長として活躍。戦後二八年帰国。二九年本学教授。農学博士。福岡県出身。

西川　英次郎　農産製造学担当。大正五年東大農芸化学卒。文部省在外研究員として英国セントアンドルース大学化学研究室に留学。帰国後鳥取高農教授。昭和二七年東北大教授。三十年名大教授。本年定年退官。米状菌の生化学に関する研究で農芸化学賞を受賞。農学博士。東京都出身。

後藤　猛次　有機化学担当。明治四五年東大農芸化学卒。大正四年英国ユニバーシテイカレッジにて有機化学を研究。さらにスイス・ジュネーヴ大学に留学。帰朝後東大講師を経て昭和一九年東大農学部教授。二四年退官。北里研究所名誉部長、日本学士院会員、前日本農芸化学会々長。「シノメニンに関する研究」で三五年学士院恩賜賞を受賞。アルカロイドの世界的権威。農学博士。福岡県出身。

岩田　武司　肥料学担当。大正十年東大農芸化学卒。農林省農事試験場、資源試験場、農業技術研究所技官を経て昭和二六年信州大学農学部教授。この間海外視察のため欧州出張。二九年信州大学農場長兼務。長野県出身。

西村　資治　醗酵化学担当。大正七年東大農芸化学卒。ドイツのミュンヘン大学留学、帰朝後大日本ビールに入社。博多、上海各工場長、目黒科学研究所部長を歴任。昭和三二年オリエンタル酵母取締役。現在同社顧問。醗酵学の権威。農学博士。秋田県出身。

中島　馨　応用醗学担当。大正二年東大農芸化学卒、山十醤油、測候中央試験所、大連醤油工務部長、目の出醤油常務を歴任。昭和二五年北鮮に渡り日本製茶肥料興業株式会社常務理事として活躍。戦後本学に迎えられ現在に至る。醤油界の重鎮。石川県出身。

渡辺　俊雄　農産化学担当。大正三年東大農芸化学卒。三五、理化学研究所を経て昭和二八年長尾研究所主任研究員。東京都出身。

日本大学農獣医学部入学志願要項（昭和三十三年度）

募集学科及び入員

（一）学部

（学科）	（専攻）	（主なる教授内容）	（募集人員）
農学科	農作物、園芸作物、育種、病害虫		一年　五〇〇名
	土壌肥料、生物化学、農産製造、醗酵化学、醸造学、食品化学		二、三年若干名 但し農芸化学科及び獣医学科を除く
農芸化学科	家畜の診療、防疫、公衆衛生		
獣医学科	一般教育、外国語、体育		
同（医科大学通学志願）	家畜の生産、飼育、人工授精、防疫、畜産経営および畜産製造加工		
畜産学科	農業経済、経営、農業政策、農業協同組合、農業史		
農業経済学科	森林の造成、保護、樹芸、木材其他林産物の加工、製造、経営、管理、林政、森林経済		
林学科	水産増殖、漁業、水産経営、水産物の製造加工		一年　四〇名
水産学科			

（二）短期大学部農業科

出願資格

（第一学年）

（イ）新制高等学校卒業者

（ロ）通常課程による十二年の学校教育を修了した者

（ハ）通常課程以外の課程（例えば通信教育）により之に相当する学校教育を修了した者

（ニ）外国において学校教育における十二年の課程を修了した者

（ホ）文部大臣の指定した者

（ヘ）新制高等学校卒業資格認定試験合格者

（ト）その他本学において新制高等学校卒業者と同等以上の学力ありと認めた者

出願手続

（イ）入学志願票（用紙は本学より交付）（医大進学志願者は志望学科欄に医大志望と記入のこと）

（ロ）出身学校長の調査書又は成績証明書（成績証明書は必ず各科目の単位又は履修時間数を附記すること）

第二学年以上の編入志願者は出身校の調査書又は成績証明書

（ハ）身体検査証明書（用紙は本学より交付）

（ニ）受験料（金二千五百円也）

（ホ）返信用封筒（住所氏名を明記し切手を貼付したもの）

右の書類を取揃え左記出願場所へ直接持参するか、又は書留郵便で送附すること。

出願期日　一月二十一日（月）より三月十七日（月）まで受付をする

出願場所　東京都世田谷区下馬町二丁目一　日本大学農獣医学部入学係

入学試験

（一）試験日時　三月十九日・二十日午前九時（八時三十分集合）

（二）試験場　東京都世田谷区下馬町二丁目　日本大学農獣医学部東京校舎

（三）試験科目　第一学年国語、英語、理科（物理・化学・生物のうち一科目選択）　第二、三学年英語、生物、口頭試問

合格者の発表と入学

（イ）合格者発表　三月二十四日正午

（ロ）入学手続　合格者は指定期間（約一週間）に入学手続を完了すること。入学手続の詳細は合格通知交付の時通知する

◎注意事項

（イ）受験票到着せざる場合は試験前日受付に申出ること。尚遠隔の為自宅出発までに受験票未着のおそれある場合には、受験場受付に保管して置くから、保管を希望する者はその旨申出で置かれたい。

（ロ）一旦受理した入学書類、受験料その他学費一切の納入金額は如何なる事由があつても返付しない。

（ハ）照会事項は凡て返信用封筒（郵券貼付宛名自記）を同封し本学部入学係宛に送付すること。

挨拶

日大総長　呉文炳

今年四月から、農獣医学部に農芸化学科が増設、開講されることに決まったことは、本学の充実、発展にとってまことによろこばしい次第である。

農芸化学科の設立は、農学部創立以来の懸案であったが、当時の資材不足その他で実現できなくて、農学科の中に農産製造学専攻という形で、苦々と基礎を固めてきたわけであるが、その間の関係者の苦労は大変なものであった。いまその労が報いられて、開講の運びに到ったことは、その労苦が大きかっただけに喜びも一入だろうと思う。

だが、農芸化学科の本格的充実、発展は、すべて今後にかかっておることなので、生みの苦労から育ての苦労へとつづくわけであるが、教職員、学生、校友が一体となって、発展に努力せられるよう希望して止まない。

学部設計の一考想

学部長　岩田耕作

綜合大学の使命は飽くまでもいう学術の蘊奥を極める場といわれているが、現代日本の立場からいえば我が国産業の開発発展の基礎を培養する機関であるともいえよう。

現時のように理科教育振興のさけばれるときには特にその感を強くするものである。理科教育といっても工学系や医学系よりも基礎部門といわれる農林、水産等の所謂プライマリインダストリーの研究をもつて使命とするわが農獣医学部の在り方については一段と深い考慮が払われなければならないと信ずるものである。

昨年来増設した農芸化学のあり方についても、従来多くの大学でやっているような土壌肥料のみに偏したり醗酵化学のみに偏したりするのにも一応の道理はあるが、もう一つ高所大所から見て人間生活全体の科学化の立場から、もう一度よく考慮して見る必要があるまいか。

たとえば、今学界の重要研究課題の一つであるクロレラの研究や、また吾々の衣料生活面に重要なる繊維革をきたしつつあるナイロン、ビニロン、アセテートなどの所謂化繊の研究また医療と必須の関係にある薬品製造等に至るまで農芸化学の研究範囲は従来のような嗜好品の一つである酒類の研究等を超越して人類の全生活面に及ぼす必要があるのではあるまいか。このことは一農芸化学に限らず水産にも林産にも畜産にも園芸にも無数の問題が横わっているであろう。

農芸化学増設を祝して

元農産製造科主任教授　山田為蔵

この四月から農芸化学科が増設されることになったことは日大農獣医学部の一大進歩であり誠にお目出度譫んで祝意を表する次第です。さきに存在していた農産製造専攻はいわば今度の農芸化学科のエムブリオとも称しうる存在であったがそれでも二十三年以来卒業生を出すこと三回二十名、それぞれところをえて活躍されていることは報いられた苦労であるとの感慨深いものがあります。

しかし残念なことにこの間何時も忘れられた存在があった。それはいうまでもなく農学の中の基幹学科である独立した農芸化学科が本学部になかったことである。農学科の中の一専攻として別の体系にそくする部門と同居して細々と研究されていた農産製造学専攻を農芸化学科として独立昇格させるべきことについては長い間のわれわれ校友会の強い念願であった、われわれのこうした念願は農獣医学部校友会でとりあげられ、昭和二十六年に農芸化学昇格対策委員会がもうけられ活発な運動が続けられて来たことは本誌をつうして度々つたえられたとおりである。幸にこれらは認められ来る新学期から新しく農芸化学科が設立されることになり、本学部が名実ともに充実されたことについて誠によろこびに堪えない次第である。

これ偏えに工藤会長をはじめ農獣医学部校友会の委員の皆さんの強い母校愛に立つた御努力と吉田理事長、岩田学部長をはじめ学校御当局の御理解によるものであって本誌を通してここに校友会の会員を代表して厚くお礼を申し上げる次第である。

報いられた苦労

校友会々長　小関淹

日本大学農獣医学部も今春で第十一回の卒業生を世に送ることになった。思えばわずか十年余の歴史しかもたない本学部もその発展充実は実にめざましいものであった。学校当局のこれらにたいする御努力には全く感服のほかない。

農産製造学専攻は農芸化学科が増設されるまでは農芸化学科の研究部門は従来の嗜好品の一つである酒類の研究等を超越して人類の全生活面に及ぼす必要があるのではあるまいか。このことは一農芸化学に限らず水産にも林産にも畜産にも園芸にも無数の問題が横わっているであろう。

これで、すつきり

農学校友会長　山本秀雄

私達が卒業致しました農学科は農学系と化学系との二つの違った部門からなっておりました。この事の修正は私達の在学当時からの懸案で有りましたが、この度農芸化学科が新設され同時に純農学系単一本の農学科が出来上りました。

私達一同は衷心より喜びに堪えない次第で有ります。このように母校が日々発展の一路を歩んで行く事は卒業生として何よりも喜ばしく感ずるものであります。

私達校友一同も微力では有りますが、母校の発展に寄与すべく活動を致しております。

新設された農芸化学科も農学科も他の学科と心を一にして真理の探究と併せて人格の完成を目指し若鮮でしかも平和な学徒の殿堂を築き上げる事を心から念願してやみません。

農芸化学科新設に際して

日本大学農獣医学部校友会々長　工藤正城

旧制農学部新設の当初より、懸案の一つであった農芸化学科が昭和三十三年度より愈々新設開講の運びとなったことは、誠に御同慶にたえない次第であります。

かえりみますると本学科新設の急務は多年本学部内において認識致しておりましたのでありますが、学部長の更迭及び旧東京獣医との併合が新校舎の建築等々の事情のもとに遅々として進捗し得なかったのであります。然るところ諸般の情勢一応整い、遂に本学科の新設が実現されたことは本学部の発展と、大同団結を堅固たらしめ諸般に処することを切望して止まません。（三十三年二月二日記）（日本大学国際研究所々員、興民社々長）

農学科新発足

純農学系単一学課として

今まで農学科内には、純農学系、学課の耕種専攻と農芸化学系学課の農産製造専攻の違った部門の二専攻があり、この二専攻の独立は永年の懸案であったが、昭和三十二年十二月二十一日に、農芸化学科が本学部内に増設され、従って耕種専攻は農学科となり、改めて純農学系単一学科として発足する事となった。学部当局は農芸化学科の設備充実に力を尽すと同時に農学科の設備拡充強化に万全を期し、研究諸設備の拡充、実験小農場の新設（大農場は厚沢に約二十余万坪）教授陣容の強加拡充に努力を重ねつつある。

農学科の学科内容の主な学科およびその研究室は

一、作物学・栽培学――作物研究室
二、遺伝、育種学――遺伝研究室
三、応用昆虫学――害虫研究室
四、植物病理学――植物生理研究室
五、植物生理学――植物生理研究室
六、土壌学、肥料学――土壌、肥料研究室
七、蔬菜園芸学――蔬菜園芸研究室
八、果樹園芸学――果樹園芸研究室
九、花卉園芸学――花卉研究室
十、応用気象学――農業気象研究室
十一、遺園学――花卉研究室
十二、農業土木学――農業工学研究室
十三、農業機械学――農業工学研究室

である。

研究室も、工事中の新校舎竣工とともに三十四室増加する事になっている。入学の学生は各自の希望により前記研究室に入室を許可され研究室員となり課外の研究及び学生活動を行う。

教授及び助教授以下教員が正規の授業外に各々配属せられた研究室にて学生の研究指導と併せて人格の陶冶に日夜努めている。

農学科の教授陣容は「稲」の世界的権威者である農博、永井威三郎教授が農学科主任教授として、科内の統轄をはかり、主に作物学、栽培学を担当し、農博、萩原時雄教授は遺伝育種学を担当され、また植物病理学植物生理学は、理博浜健夫教授が担当する。蔬菜園芸は農博、江口庸雄教授、果樹園芸は現千葉大学教授農博、水沢勝雄講師が担当している。応用昆虫学は現科学技術庁科学審議官　農博河田党講師担当して居る。農産工学系では本年四月より教授一名新任され現任居られる田畑講師と授業を担当される。

以上の教授により農学科の骨組が出来、その下に助教授、専任講師、助手、副手が配属されて居り学生の指導に当って居る。

農学科に取って必須の実習農場は神奈川県厚沢市に約二十余万坪の大農場が有るが現在東京での実験研究用圃場及び温室とそれに伴う研究諸施設は手狭であるが実験研究用圃場として校舎の附近に設置準備中であり、この完成の暁には「学即行也」の農学の大系が出来、学生の学問研究、技術修得とそして高遇なる人格養成の機関となり、前途有為な大器の若人を社に送り出し得るものと確信して居る次第である。

農獣医学部教授陣容

学部長　経済学博士　岩田耕作
農学博士　新崎盛敏
農学博士　石川昌
農学博士　石渡悦郎
農学博士　板垣四郎
農学博士　石森直人
農学博士　内田勇三郎
農学博士　宇田道隆
農学博士　江口庸雄
農学博士　大森智塙
農学博士　小国秀男
農学博士　小野元雄
農学博士　岡本正行
農学博士　大獄了
農学博士　大村収
農学博士　大村秀雄
農学博士　太田勇治郎
農学博士　岡部利雄
農学博士　越智勇一
農学博士　荻原貞夫
農学博士　岡本清造
工学博士　小川清二
農学博士　奥野博
農学博士　大江賢太郎
農学博士　大熊俊一
獣医学博士　川田信平
理学博士　川村実平
理学博士　金谷復五郎
農学博士　川島恒吉
農学博士　河田党
農学博士　川島一三
農学博士　長倉義夫
農学博士　木全春生
農学博士　衣川義雄
林学博士　岸上慎二
農学博士　倉田吉雄
農学博士　釘本昌二
理学博士　久保伊津男
農学博士　熊凝武晴
農学博士　栗田黙
農学博士　呉守一
農学博士　久木田賢志
農学博士　桑原志都夫
農学博士　後藤格次
理学博士　小久保清治
農学博士　近藤正一
医学博士　小堀進
農学博士　松本太郎
工学博士　松葉栄重
経済学博士　細谷英夫
農学博士　福島正次
農学博士　藤村信次
医学博士　深町穂積
農学博士　藤貫清
理学博士　古川利夫
理学博士　蓮池公吠
理学博士　浜健夫
文学博士　馬場明男
農学博士　萩原時雄
農学博士　橋川渡
農学博士　根岸勉治
農学博士　長倉義夫
農学博士　永沢勝雄
農学博士　佐々木清綱
農学博士　桜井成広
農学博士　斎藤秀一
農学博士　斎藤義蔵
農学博士　塩谷明雄
農学博士　杉浦庸一
農学博士　鈴木太七
農学博士　関根隆
農学博士　田中丑雄
理学博士　高山茂七郎
理学博士　田内森三郎
農学博士　永井威三郎
農学博士　中島顕三
農学博士　西郷啓造
農学博士　佐藤繁雄
農学博士　岡部利雄
農学博士　佐々木清綱
農学博士　斎藤義蔵
農学博士　塩谷明雄
農学博士　杉浦庸一
農学博士　鈴木太七
農学博士　関根隆
農学博士　田中丑雄
理学博士　高山茂七郎
理学博士　田内森三郎
農学博士　永井威三郎
農学博士　中島顕三
獣医学博士　川田信平
理学博士　川村実平
理学博士　金谷復五郎
農学博士　川島恒吉
農学博士　河田党
農学博士　大熊俊一
農学博士　大江賢太郎
農学博士　奥野博
工学博士　小川清二
農学博士　岡本清造
農学博士　荻原貞夫
農学博士　大獄了
農学博士　大村収
農学博士　大村秀雄
農学博士　太田勇治郎
農学博士　岡部利雄
農学博士　越智勇一
農学博士　大熊俊一
獣医学博士　川田信平
理学博士　金谷復五郎
理学博士　川村実平
農学博士　河田党
農学博士　川島恒吉
農学博士　長倉義夫
農学博士　木全春生
農学博士　衣川義雄
林学博士　岸上慎二
農学博士　倉田吉雄
農学博士　釘本昌二
理学博士　久保伊津男
農学博士　熊凝武晴
農学博士　栗田黙
農学博士　呉守一
農学博士　久木田賢志
農学博士　桑原志都夫
農学博士　後藤格次
理学博士　小久保清治
農学博士　近藤正一
医学博士　小堀進
工学博士　松本太郎
経済学博士　松葉栄重
農学博士　細谷英夫
農学博士　福島正次
農学博士　藤村信次
医学博士　深町穂積
農学博士　藤貫清
理学博士　古川利夫
理学博士　蓮池公吠
理学博士　浜健夫
文学博士　馬場明男
農学博士　萩原時雄
農学博士　橋川渡
農学博士　根岸勉治
農学博士　長倉義夫
農学博士　永沢勝雄
農学博士　増井清
獣医学博士　松浦文雄
医学博士　松井武夫
農学博士　前野正久
農学博士　満足卓
林学博士　三浦伊八郎
医学博士　三好晋
農学博士　宮崎三郎
農学博士　道広智
農学博士　右田伸彦
農学博士　村山敏三
獣医学博士　作祥一
法学博士　百瀬文雄
農学博士　山名寿三
農学博士　田貞次郎
農学博士　渡辺清次郎